両手を広げて

東京大学大学院工学系研究科教授 野崎 京子
Kyoko Nozaki

新年あけましておめでとうございます。2021 年が皆様にとって飛翔の年となることをお祈りします。さて、年の改まるこの機会に、矢のように過ぎ去っていく「時間」の過ごし方について考えてみたい。昨年のお正月には誰一人予想しなかったパンデミック。その激震で時代が10年以上いっきに進んだように感じる。大学における研究・教育のスタイルが激変した。オンライン・在宅が一瞬で当たり前になった。以前は出張の合間に東京に戻って行るのが当然だった講義。オンラインなら出先から簡単に受講できる(出張もなくなりましたが)。学生もオンライン講義のチャットなら気軽に質問できるらしく、対面よりも質疑が活発化するという思いがけないおまけもあった。海外の大学訪問もオンライン。以前なら片道12時間以上飛行機に乗り、最低でも2泊4日かかっていた米東海岸の大学訪問と講演。東京にいながら三日連続で夜10時から午前1時までの3時間PCの前に座っていたら、ほぼ同じメニューをこなせてしまった。実働の9時間だけ。昼間は普通に大学で勤務して、夜だけの外国出張だった。時間が魔法のように湧いてきた。

研究報告会も変わった。30人近くの研究室メンバーを一室に集める代わりに、各自思い思いの場所でPCを接続する。私が出産したところにオンライン会議システムがあったなら産院からでも参加できた。子供が病気で在宅でディスカッションできたかも(いや、子供に邪魔されて無理かな)。場所の自由度だけではない。以前なら「後で調べます」と言ったきりうやむやになりがちだったことでも、さっと検索すればその場で画面共有して解決できる。オーラルのメインディスカッションの裏で、チャットディスカッションも進む。日英バイリンガルで。従来の一室に座してじっと拝聴するスタイルとは全く異なるスピード感が心地よい。こんな便利なツール、どうして今まで使わなかったんだろう。何の疑問も持たずに抱えてきたやり方を手放すいい機会になった。

では、こうしてできた時間をどう使おう? コロナ禍のステイホーム期間中に、懸案の事項が片付いた方も多

いのではないだろうか。論文執筆がサクサク進み、レビューまで書けた。いったい今まで何に時間を取られていたのやら。学会出張もなければ訪問研究者もない。とっても快適だ…。が、同時にインプットが減ってしまったダメージは、じわじわとアクティビティ低下として表れてきそうな気がする。知らず知らずのうちに井の中に沈んでしまう不安がある。

「星の王子様」で商人が売っていた喉が渇かなくなる丸薬のことを思い出す。この薬を飲めば水を飲む必要がなくなって時間を節約できるという商人に王子は「ぼくはその時間で泉に歩いて行く」と答える。オンライン化で余裕ができた時間に、日々の雑事を押し込んでしまっただけではない。今日はぼーっとしよう。そして人に会いに行こう。ゆっくりと話す時間をもとう。豊かな時間を過ごそう。時間ブルジョアになろう。

今や対面で会うことはとても贅沢なことになった。オンライン講演会・オンライン懇親会でも、確かに情報は共有できる。けれど、研究者人生を変えるような出会いは、対面で時空を共有してこそ生まれるような気がする。有化編集委員会は終了後の集いの方が重要なのではない(いや本番も大切です)。当研究室では今も、少人数の研究報告会は寒風の中、ドアを開け放して対面で行っている。オンラインにはない議論の深さがある。できることならアルコールで口の滑りを良くしてのディスカッションも復活させたいが、残念ながら卒業生が送ってくれた日本酒は、教授室のワインセラーに入ったまま。なんとか形を変えて議論の機会を増やしたいものだ。限られた条件下でも人と人がぶつかり合い、衝突の瞬間のスパークが新展開につながるしくみをつくりたい。

今こそ変わっていくチャンス。次々に襲ってくる些末な問題は、知恵と工夫で乗り切ろう。常識にとらわれず、後生大事に抱えてきた古いやり方は手放して、両手を自由にしよう。自由になった両手を広げて、できるだけ遠くまで手を伸ばそう。いろいろな形で人に会い、新春の風を捉えて新しい空へ羽ばたこう。

(2020年10月31日受理)